

---

# IS ~インフィニット・ストラトス~ もう一人の一夏!?

たかていん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS〈インフィニット・ストラトス〉 もう一人の一夏！？

### 【Nコード】

N2918Q

### 【作者名】

たかていん

### 【あらすじ】

一夏と同じ感じのキャラ以外の男をIS学園に入れたくない・・・どうしたら同じキャラでも大丈夫か？と、考えていると双子なら同じキャラでも当たり前！って感じでやってみることにしました！初めてなので、わけわからない感じになっていることがあるとは思いますが、どうかあたたかい目で見守って下さい。

## e p o プロローグ(前書き)

プロローグの最初は原作とほぼ一緒ですが、e p iからはオリジナル満載で行きたいと思います！

## e p o p ロローケ

「全員そろってますねー。てっ、席が一つ空いてますね……まあそろそろ来るでしょう。とりあえずSHRをはじめますよー」

SHRがはじまり、一年一組の副担任<sup>やまた</sup>山田真耶<sup>まや</sup>先生が何やら話していた。だが、その話を聞いている生徒はおそろくないだろう。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……」

やはり教室の中は変な緊張感に包まれていて、誰からも反応がない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

ちよっとつろたえる副担任がかわいそうなので、せめて俺くらいは反応しておこうと思わなくもないのだけれど、いかんせんそんな余裕はない。

なぜか。

簡単だ。俺以外のクラスメイトが全員女子だからだ。

今日は高校の入学式。新しい世界の幕開け、その初日。それ自体はいい。むしろ喜ぶべきところだ。

だがしかし、問題はとにかくクラスに男が俺一人という点だ。

それもそのはず、ここは公立IS学園。女性にしか使えないIS、正式名称『インフィニット・ストラトス』の操縦者を教育する機関である。だからここに男がいる方がおかしいのである。

そのため、先生の話なんかよりも、この学園にいるただ一人の男子生徒の方に注目してしまうのだった。しかも男子生徒の席は、一番前のしかも真ん中なので、嫌でも視線が集まってしまう。

(これは……想像以上にきつい……)

そんなことを考えていると、

「……くん。織斑<sup>おじむら</sup>一夏<sup>いちか</sup>くんっ」

「は、はいっ!?!」

いきなり山田先生に大声で呼ばれて思わず声が裏返ってしまった。案の定、くすくすと笑い声が聞こえてきて、俺はますます落ち着かない気分になる。

どうやら山田先生の話が終わり、生徒の自己紹介に入っていたらしい。そしてどうも、順番が回ってきたらしい。

「あっ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だから、その、自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っっていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

がばつと顔を上げ、俺の手を取って熱心に詰め寄る山田先生。……あの、またすごい注目を浴びているんですが。

しかしまあ、すると言った以上、男子たるもの引くわけにはいかない。それになにより、最初に溝を作ると二度と環境には馴染めないと見た。

しっかりと立って、後ろを振り向く。

(うつ……)

今まで背中に感じていただけの視線が一気に俺に向けられているのを自覚する

「え、えーと、織村一夏です。よろしくお願いします」

儀礼的に頭を下げて、上げる。      ちよつと待て、なんだその『もっと色々喋ってよ』的な視線は。そしてこの『これで終わりじゃないよね？』的な空気はなんだ。

そんなに喋ることないぞ。無趣味って訳じゃないが、別に万人に聞いてほしいってほどでもないし、だいたい初対面でいきなりそんな趣味とか話されたら困らないか？

「……………」

だらだらと背中に流れる汗を感じる。どうしたらいい、何を言え  
ばいいんだ。

「……………」  
（いかん、マズイ。ここで黙ったままだと『暗いやつ』のレットル  
を貼られてしまう）

俺は呼吸を一度止め、そして再度息を吸い、思い切って口にしよ  
うとしたところ、

だだだだだっ　　ウィーンッ！

突然教室のドアが勢いよく開けられ一人の生徒が入ってきた。

「すみません、遅れました！！」

「……えっ？」「」

「!?!？」

クラスみんなが同じ反応をした。なぜなら、入ってきた生徒は  
男だったのだ　、しかも一夏と見た目がそっくりなのだ。

クラス全員が固まっているなか、一夏が大声で叫んだ。

「い、一夜いちや!?!？」

「おー、一夏。久しぶり、六年ぶりか」

一夜と呼ばれた男に一夏が近づいていく。

「お前、今までどこ行ってたんだよ!?!？」

そして大声を出した直後。

パンッ！パンッ！二人はいきなり頭を叩かれた。

「……いつ　!?!？」

痛い、と言う無脊椎反射より、あることが二人の頭をよぎった。

この叩き方　威力といい、角度といい、速度といい、とある人

物　よく知っているとある人物が同じような感じなのですが……

……。

「……………」

二人して、おそろおそろ振り向くと、黒のスーツにタイスカート、  
すらりとした身長、よく鍛えられているがけして過肉厚ではないボ  
ディライン。組んだ腕。狼を思わせる鋭いつり目。

「げえつ、関羽!?」

「パアンツ! パアンツ! また叩かれた。ちなみにすっげえ痛い。その音があまりにも大きいから、見るよ女子が若干名引いている。」

「誰が三國志の英雄か、馬鹿者」

「トーン低めの声。俺にはすでにドラの効果音がきこえているんですが、はて。」

「いやしかし。待て待て待て。なんで千冬姉ちふゆがここにいるんだ? 職業不詳で月一、二回ほどしか家に帰ってこない俺たちの実姉は。」

「ここで教師やってるのは聞いてたが。山田先生は副担任だし、まさか千冬姉が担任なのか?」

「ちなみに最初が一夏で、次が一夜とゆう順である。」

「あ、織村先生。もう会議は終わられたんですか?」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかつたな」

「おお、俺たちは聞いたこともない優しい声だ。関雲長はどこへ? 赤兎馬に跨がって去ったのか、劉備の元へ?」

「い、いえつ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

「副担任の山田真耶先生は若干熱っぽいぐらいの声と視線で担任の先生へと答えている。あ、はにかんだ。」

「諸君、私が織斑千冬おりむらちふゆだ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は若干十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが私の言うことは聞けないな」

「なんとという暴力宣言。間違はなくこれは俺たちの姉・織斑千冬。」

「だが教室には困惑のざわめきではなく、黄色い声援が響いた。」

「キヤ　千冬様、本物の千冬様よ!」

「ずっとファンでした!」

「私お姉さまに憧れてこの学園に来たんです! 北九州から!」

いや別に南北海道でもいいけどさ。

「あの千冬様にご指導いただけると嬉しいですね。」

「私、お姉さまのためなら死ねます!」

きやいきやいと騒ぐ女子たちを、千冬ねえはかなりうつつとうしそうな顔で見る。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者どもが集まるものだ。感心させられる。それともなにか? 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか?」

これがポーズではなく、本当にうつつとうしがってるのが千冬姉だ。千冬姉、人気は買えないんだぜ? もうちょっと優しくしようぜ。

と思つた俺が甘かつた。

「きゃああああっ! お姉さま! もっと叱って! 罵って!」

「でも時には優しくして!」

「そしてつけ上がらないように躰をして!」

クラスが元気なようになによりですね。

しかし俺も自分のクラスの担任が千冬姉だったことに混乱と驚愕している。はずだったんだが、先刻の女子の黄色い声で逆に落ち着いた。自分より強い感情が近くにあると人は相対的な意識が働いて落ち着くらしい。その通りだなと身をもつて知つた。

「で? 挨拶も満足にできんのか、お前は。それに初日から遅刻するやつもいるみたいだしな」

辛辣。しんらつ。極めて手厳しいという意味。まさに俺の実際の姉の言葉はそれだった。

「いや、千冬姉、俺は」

「パンツ! パンツ!」

(くおおお、いつてえ〜)

二人の頭に、本日三度目の強烈な出席簿アタック。知ってる、千冬姉。頭を叩くと脳細胞が五千個死ぬらしいよ。

「織村先生と呼べ」

「……はい、織村先生」

このやり取りがまずかった。つまり一夏と一夜はともかく、千冬姐と俺たちが兄弟だと言うことがクラスのみんなにばれてしまったのだ。

「えっ、織村君と千冬さまって・・・」

「それじゃあ、世界で唯一『IS』を使えるっていうのも、それが関係して……」

そこまでいって、あることに気がついたらしく、みんな一夜の方へと視線を向けた。その目には『男の子がもう一人……』『しかも織斑君……一夏君にそっくり……』という意味がこもっていた。そしてみんなどうしたものかと思い、しばしの沈黙を作ってしまった。

「……」

その沈黙を破ったのは千冬姉だった。

「あー。織斑　じゃあ二人いるな……。一夜とつとと自己紹介しろ」

「あっ、はい。織斑おじむら一夜いしづです。見ての通り一夏とは兄弟で、というか双子です。そして世界で二人目の男性IS操縦者です。よろしくお願ひします」

「なっ、一夜お前　」

「……　きゃあああああ!!」「」「」

一夏が何かを言おうとしていたが、その言葉は女子の歓声に掻き消されてしまった。

「このクラスに二人目の男よ!!」

「しかも双子で千冬様の弟よ!!」

まだ他にもいろいろ言っていたが聞かないことにした。

それから千冬姉が場を静め、SHRは終わった。

## e p o プロローグ(後書き)

読みにくいかもしれませんが、どうかあたたかい目で見守ってください。

## e p 1 (前書き)

すいません。プロローグのここではe p 1からはオリジナル満載と  
書きましたがそれほど出せませんでした(^| ^;) )

一夜が今までどこにいたか?ということしかオリジナルではありません  
せんね(^| ^;) )

以後頑張ります . . .。

S H R が終わり、一時間目の I S 基礎理論授業きそりろんじゆぎょうが終わって今は休み時間。俺、

織村一夜と織村一夏は屋上に来ていた。

なぜ屋上かと言うと、この学園に男子生徒が俺と一夏だけ。しかも、双子で元日本代表で全国女子の憧れ、織斑千冬の弟というプロフィールまでついているのだから。

学園中の女子が教室の中から外から俺たち二人に注目しているのだ。

S H R と一時間目の間に話をしようとしたが、あれだけ注目されると俺たちめ

気軽に話をするきになれなかった。

だから、一時間目が終わり、俺たちは教室から逃げるように屋上へとやって来たわけだ。

「一夜。お前この六年間、どこで何してたんだ？」

そう一夏が聞いてきた。だから俺は

「どこにいたと思う？」

と、質問に質問で返した。

「いや、わからないから聞いたんだが……」

「ふむ。では、ヒントを出そう。俺は六年前、同じ時期にいなかった人について行って、家を出た。」

「……同じ時期って、まさか」

「そう、そいつは私について来たのだ」

一夏が言おうとした言葉を、誰かが先に言った。

それは篠ノ之<sup>しののぎ</sup>葺。俺たちの幼なじみだ。

ちなみに、先ほど俺たちが千冬姉に叩かれているとき、葺は呆れてため息をついていた。

「おう、葺。久しぶり」

俺たちは言葉を見事にはもらせ、葺に挨拶した。

「相変わらずだな、お前らは。それと、さっきの答えだが  
ため息を一つついて、葺は続けた。」

「正確には私に、ではなく……その、私の姉についていったのだ」

葺の姉、つまり篠ノ之<sup>たばね</sup>束だ。そして彼女は、今世界で研究、開発が行われているISを作った人物なのだ。

「でも、一夜は束さんになんでついていったんだ？」

「まあ、なんつうか。篠ノ之一家が引越す前にIS動かしちゃったんだよ。それを束さんに見つかって一緒に来ないか？って言われたんだ」

一夏が、はっ？って顔しちゃってるな。

「……………一夜、今なんて言った？」

「だから、ISを動かしちゃったから、束さんについてったんだよ」

もう一度言つと、ようやく俺が何を言ったか理解したらしく。

「お前、いなくなる前にIS動かしたってのか！？」

「おう」

俺は普通に返事をする。すると、はあ、と一夏はため息をついた。おいおい、いきなりため息かよ。

「そついや俺はニュースで報道されたのに一夜は、なんで報道されてないんだ？」

「そりゃ俺は、葺と束さん以外に見られてないし。入試の時は束さんと千冬姉がなんとかしてくれたし」

「……………まあ、いいや。しかし、ついてくならついてくで、なんで連

絡しなかつたんだ？」

「千冬姉には言ったんだが……。聞いてなかつたんだな」

「だから千冬姉、いきなり落ち着いたのか……」

まあ、千冬姉は俺や一夏にISの事教えようとしなかつたからな……。

「……二人とも私の存在を忘れるな」

「あ、すまん。忘れてた」

ドスツ！ぐお、腹にパンチがめり込んだ……。めちゃくちゃ痛い……。

箒を見てみると……。あ、目そらされた。どうやら怒らせてしまつたらしい。うーむ、どう機嫌をとろうか。

「「そういえば」」

「何だ？」

そんなことを考えていたが、ふと思い出したことがあつて、俺は話を切り出した。そしたら、一夏と見事にはもってしまった。

しかし話を止めるつもりはなかつた。なぜなら同じことを言うつもりだと思つたからだ。

「「去年、剣道の全国大会で優勝したつてな。おめでとつ」」

案の定、俺と一夏は一字一句同じことを言つた。

「……………」

箒は俺たちの言葉を聞くなり、口をへの字にして顔を赤らめた。

……。え？なんで起こつてんの？褒めたのに。

「なんでそんなこと知つてるんだ」

「「なんでつて、新聞で見たし……」」

あ、またはもつた。

「な、なんで新聞なんか見てるんだつ」

いや、新聞くらい好きに読ませろよ。

「「あー、あと」」

あ、またはm て、もういや。

「な、何だ!？」

「……………」

「あ、いや……………」

さすがに自分の剣幕に気づいたのか、ばつが悪そうにする。しかし妙に興奮してるな。不思議なやつだ。

「久しぶり。六年ぶりだけど、箒ってすぐわかったぞ」

「え……………」

「ほら、髪型一緒だし」

そう言っただけでちよんちよんと俺たちが自分の頭を指さすと、箒は急に長いポニーテールをいじりだした。

「よ、よくも覚えてるものだな」

「いや、忘れないだろ、幼なじみのことくらい」

ギロリ。また睨まれた。えー、なんで。

「ん？そっぴいや一夜。なんでお前も六年ぶりなんだ？」

えー、なぜにこのタイミング？ま、いいけど。

「ああ、最初は篠ノ之家についていたけど、東さんが篠ノ之家から離れるって時に東さんの方についていていつてからな。箒とは、俺も六年ぶりなんだ」

あー、なるほど。と一夏が納得している。

キーンコーンコーンコーン。

おっと、時間切れだ。二時間の開始を告げるチャイムである。俺は「教室に戻るうぜ」と、箒たちに言った。しかし、そこにはすでに箒の姿はなかった。

そして教室に戻ると、

パァンッ！パァンッ！

「とつとと席に着け、織斑」

「……………」ご指導ありがとうございます、織斑先生」

なるほど、こうなることがわかっていたから、箒は先に戻ったのか。声くらいかけてくれてもいいのに……………。

千冬姉のありがたいご指導を受けたあと、俺たちは席に着き、授業を受けていた。

(あー、暇だ。こんなの、東さんに聞いて知ってるしな)  
そんなことを考えながら一夏の方をしてみる。すると、どっかりと積まれた教科書五冊の、一番上のものをぱらりとめくり見ている。しかし、一夏は意味不明という感じの顔をしていた。

ときおり隣の女子を見ては、焦っているように見える。  
よし、ここは俺が助けてやるか。

そう思い一夏にしか聞こえない程度の声で話しかけてみる。

「おい、一夏。お前、授業わかってねえだろ？」

「一夜か、助かった。……そうなんだ、全くわからん」

(全く？全くはありえんだろ……)

「参考書は読まなかったのか？」

「いや、あれは……」

(……)

「……お前まさか、捨てたのか？」

「うっ、そうなんだよ……古い電話帳と間違えて……」

(馬鹿か？馬鹿なのか、お前は？)

「はあ、しょうがない。放課後俺が教えてやるよ」

(本当か！？それは助かる)

「おい、織斑どうかしたのか？」

話しているのに気がついたのか、千冬姉が訊いてきた。

「あ、いえ、その……」

と、一夏がどう返事をするか迷っていた。

「織斑くん、なにかわからないところがあったら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

えっへんとでも言いたそうに、胸を張る山田先生。おお、もしかしたら頼れる先生なんだろうが、よし思い切って言ってみよう。

「先生！」

「はい、織む……一夜くん！」

さっきまで俺と一夏に対してだったから織斑くんだったが、今は一夜くんと言いつ直したな……。

まあなんにせよ、やる気に満ちた返事だ。いいぞ、この人はさすが先生だ。

「一夏が全くわかってません」

「お、おいつ」と一夏がなにか言っていたが、俺は聞いていない。

「え……。ぜ、全部、ですか……？」

山田先生の顔が困り度百パーセントで引きつった。……あれ？頼れる先生はどこに？

「え、えつと……一夏くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

拳手を促す山田先生。

シーン……。

うん、やっぱり最初からわからないなんてのは一夏だけか。その

一夏は「え！？みんなわかるのか？」って感じである。

「……一夏、入学前の参考書は読んだか？」

千冬姉が一夏に訊いた。

「古い電話帳と間違えて捨てました」

おおっ！正直に打ち明けた！

パアンッ！

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者」

やはり、一夏は叩かれた。今日何回目だよ……。

「あとで再発行してやるから一週間以内に覚える。いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちよっと……」

「やれと言っている」

「……はい。やります」

あわれ一夏。千冬姉に睨まれて、「はい」としか言えなくなっている。

「……………」  
一夏はなにかを考え、ふう、とため息をついた。どうやら覚悟を決めたらしい。

まあ、せめて、千冬姉に恥をかかせないくらいにはやれないと…  
…みたいなことを考えているんだろうな。

そんなやり取りをしていると、授業が終った。

「ちよつと、よろしくて?」

「「へ?」「」

二時間目の休み時間、SHRのあとのように針のむしろを味わうかと思っつい

た俺たちは、いきなり声をかけられてすっとなきょうな声をだした。

ep1 / 5 キャラ紹介へ続く

e p 1 (後書き)

次回キャラ紹介をしてその次セシリアが出てきます！

ep1 5 オリキャラ紹介(前書き)

今回はオリキャラ設定です。っていつても一夜しかないんですけど...

## ep1 / 5 オリキャラ紹介

<キャラ紹介>

キャラクター名

織斑一夜おりむら いちや

身長・体重・髪

一夏と同じ

趣味

料理・洗濯・武道全般

特徴

文武両道

説明

一夏と違い、IS学園に入学した今でも剣道はもちろん、どんな武道でもやってきている。しかもそのレベルは最強クラスである。〃生徒会長クラスである。そして六年間束とともに行動したことにより、ISに関してのことはもちろんのこと、学業の面でも天才となっている。

専用IS

黒式くろしき

世代

第4世代

製作者

篠ノ之束

外見

白式の黒色バージョンびやくしきくろしき

待機状態

黒いガントレット

性能

近接戦闘を基本としているため通常機よりもかなり機動力が高い。白式よりも、すこし高い。もちろん中距離戦闘も可能だが、近接格闘よりは確実に劣るおと。だが、近接格闘のレベルが異常なので、近接戦闘に劣るといっても、ブルーティアーズと同じ程度には中距離戦闘ができる。

ワンオフアビリティ  
単一使用能力

ヴァンパイアシャドー  
吸血の影

説明

零落白夜同様、相手のシールドバリアを消すことができる。それも、零落白夜のように消滅させるのではなく、自分のシールドエネルギーとして吸収することができる。シールドバリアだけでなく、エネルギー質の物をすべて、自分のシールドバリア

ルドエネルギーとして吸収することができる。しかし吸血の影の使用中は、白式の零落<sup>れいらくびやく</sup>白夜<sup>びやく</sup>同様自分のシールドエネルギーを必要とする。

#### 武装

影刀<sup>えいとう</sup>

#### 外見

雪片の黒色バージョンの刀

#### 説明

影刀は雪片と同じ形をした近接戦闘用の

武器である。

第4世代技術である「展開<sup>てんかい</sup>装甲<sup>そうこう</sup>」が使われている。

#### 武装

<sup>メターストリック</sup>流星の影

#### 外見

黒く輝くビット状のレーザー兵器×10

#### 説明

流星の影はブルーティアーズと同じ大きさ

のビット状のレーザー武器。その数は、ブルーティアーズより四機多い十機。流星の影のスピードは光速に近い。そのため移動する際、黒い影のようなものがビットの後を追っているように見え、それが流星<sup>りゅうせい</sup>の影<sup>かげ</sup>のように見える。だから、名前が流星の影なのだ。第4世代技術である「展開<sup>てんかい</sup>装甲<sup>そうこう</sup>」が使われている。

ep1 / 5 オリキャラ紹介（後書き）

ISが半端ないですね……。しかも、ちょっと訳がわからなくなってるし……。

まあ、そこはオリジナルなので許して下さい（＾|＾；）

次回はセシリアが出てきます。

ISの性能について指摘がありましたらどんどん教えてください。

e p 2 (前書き)

今回セシリアが出来るようになります。

「ちよつと、よろしくて？」

「へ？」

side ichiya

二時間目の休み時間、またしても針のむしろを味わうかと思つていた俺たちは、いきなり声をかけられて素<sup>す</sup>頓<sup>とん</sup>狂<sup>きやう</sup>な声を出した。

話しかけてきたのは、高貴なオーラを出している金髪が鮮やかな女子だった。その女子の雰囲気は『いかにも』今の女子という感じだった。

今の世の中、<sup>アイエス</sup>ISのせいで女性はかなり優遇されている。優遇どころか、もはやいきすぎて女<sup>じよ</sup>偉<sup>ゐ</sup>いという構図になり、男<sup>だん</sup>尊<sup>そん</sup>女<sup>じよ</sup>卑<sup>ひ</sup>ならぬ女<sup>じよ</sup>尊<sup>そん</sup>男<sup>だん</sup>卑<sup>ひ</sup>になってしまっていた。そうなると男の立場は完全に奴隷、労働力だ。今じゃ町中ですれ違っただけの女にパシリをやらされる男の姿なんて珍しくもない。

つまりそういう、いかにも現代の女子が目の前にいた。腰に当たった手が様になつてゐるあたり、実際いいところの身分なのかもしれない。

ちなみにこのIS学園では無条件で多国籍の生徒を受け入れなくてはいけないという義務のせいで、外国人の女子なんて珍しくもない。むしろ、クラスの女子の半分がかりうじて日本人というだけだ。「訊いてます？お返事は？」

「あ、ああ。訊いてるけど……どういう用件だ？」

一夏がそう答える。あー、一夏の馬鹿。いまだきつて感じのやつに、そんな答えかたしたら……。そんなことを考えていると、案の定、目の前の女子はかなりわざとらしく声をあげた。

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なの」

「ですから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「……………」

正直、この手合いは苦手だ。一夏も黙っているあたり、同じ気持ちなのだろう。

ISを使える。それが国家の軍事力になる。だからIS操縦者は偉い。そしてIS操縦者は原則女しかない。

だからといって、その力を振りかざすのは違っだろう。力が粗暴なら、そんなものはただの暴力だ。

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「俺も知らない」

実際、知らない。なんか自己紹介でなにか色々言っていた気がするが、正直覚えていない。一夏にあとで、なにかから話すか考えていた。しかも千冬姉が担任だったことは、俺も知らなかった。

その二つの事が頭の中を埋めていたので、他の人のことなんて考えている暇はなかった。

しかしどうもその答えは、目の前の女子（いい加減名前を教えてくださいると助かる）にとってはかなり気に入らないものだったらしい。吊り目を細めて、いかにも男を見下した口調で続ける。

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリス代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

ああ、名前セシリアっていうのか。ふーん。

「あ、質問いいか？」

一夏がなにか訊きたいことがあるらしい。

「ふん、下々（しもじも）のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「……………代表候補生って、何？」

がたたっ。聞き耳を立てていたクラスの女子数名がずっこけた。ちなみに、俺もずっこけた。

「あ、あ、あ……」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの!？」

「すごい剣幕けんまくだった。マンガだったら血管マークが三つはついてそ  
うだな。」

「……………」

俺もセシリアと一緒にあって、こめかみを人差し指で押さえてし  
まった。

「えっ?なんで一夜まで……………」

「何でつてお前。俺はちゃんと勉強してきてんだよ」

「そうなのか…………。で、一夜。代表候補生つて？」

「国家代表IS操縦者の、その候補生として選出されたやつのこと  
だ。…………まず、単語から想像すればわかるだろ」

「そついえばそつだ」

なあ一夏よ、それくらいはわかっておけよ…………。

「そつ、つまりエリートなのですわ!」

おお、復活した。さっきまで一夏のアホさに呆れていたのに。さ  
すがは代表候補生。

びしつと俺たちに人差し指を向けた。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じにす  
ることだけでも奇跡…………幸運なのよ。その現実をもう少し理解して  
いただける?」

「そつか。それはラッキーだ」

「…………馬鹿にしていますの?」

「…………(お前が幸運だつて言ったんじゃないか)…………」

「…………まだなにか言いたそうですわね」

「イヤ、ナニモ」

なぜ女というのは人の考えていることがわかるのだろうか…………

「…………大体、あなたはISについて何も知らないくせに、よくこの  
学園に入れましたわね。唯一…………今は二人ですが、男でISを操縦

できると聞いていましたから、すごい方なのだろうと思っていましたけど、期待はずれですわね」

「俺に何か期待されても困るんだが」

一夏さん、お疲れ様です。

「ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ。当然、そちらのあなたも」

おお、この態度が優しさなのか。十五年生きてきてはじめて知っ  
たぜ。

アイエス

「ISのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくなってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

唯一、をものすごく強調された。　　って、ん？

「入試って、あれか？ISを動かして戦うやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官。一夜は？」

「ん？ああ、俺は引き分けだ」

「は……？」

確か、倒したっていつか、いきなり突っ込んできたのをかわしたら、勝手に壁にぶつかってそのまま動かなくなっただけ。とか言ってたな。

ちなみに俺は千冬姉が相手だったんだよな。30分くらいやり合って、「時間の無駄だな。引き分けにして、終わるぞ」って、なつたんだよな。正直あと十分ももたなかっただろうが……。

まあ、俺のことは置いといて。一夏も勝ったということか相当シヨックだったのか、セシリアは目を驚きに見開いている。

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

ピシッ。あ、何かいやな音だ。氷にヒビが走ったような、そんな音が聞こえた。

「っ、つまり、わたくしだけではないと……？」

「いや、知らないけど」「  
「あなた！あなたも教官を倒したって言うの！？」  
「うん、まあ。たぶん」  
「たぶん！？たぶんってどういう意味かしら！？」  
「俺は倒してないぞ」  
「あなたは黙っててくださいー！」  
「えーなんで？俺にも言つてたじゃん……」  
「とにかく落ち着けよ。な？」  
「こ、これが落ち着いていられ」

キーンコーンカーンコーン。

お、三時間目の開始を告げるチャイムだ。ナイスタイミングだ。  
これでやっと解放される。

「っ……！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！？」  
「（）よくない（）まだ俺たちは、このお嬢様から解放されないらしい。」

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

おっと。一、二時間目とは違って、山田先生ではなく千冬姉が教壇に立っている。気持ちを切り替えて授業を受けないと。千冬姉は容赦なく叩いてくるだろうからな。

「ああ、その前に再来週<sup>来週</sup>再<sup>再</sup>週<sup>週</sup>行<sup>行</sup>わ<sup>わ</sup>れるクラス対<sup>対</sup>抗<sup>抗</sup>戦<sup>戦</sup>に出る代表者と、副代表者を決めないといけないな」

そんなことを考えていると。ふと、思い出したように千冬姉が言う。うん？クラス対<sup>対</sup>抗<sup>抗</sup>戦<sup>戦</sup>？代表者？なかなか面倒くさそうだな。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対<sup>対</sup>抗<sup>抗</sup>戦<sup>戦</sup>だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにク

ラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移じつりょくすいを測るものだ。今の時点で対した差はないが、競争は向上心を生む。まあ、副代表者は代表者のサポートだな。一度決まると代表も副代表も、基本的に一年間変更はないからそのつもりで」

ざわざわと教室が色めき立つ。なんか思ってた以上に大変そうだな。なるやつ

はご苦労様だ。

「はいっ。織斑兄弟を推薦します！」

ん？今なんて言った？織斑って言わなかったか？いや、聞き間違いだろ。

「私もそれが良いと思います！」

まあ、俺以外なら誰でも良いんだが。

「では候補者は織斑一夏、織斑一夜……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

うん、一夏か。お疲れ様です　　って

「「お、俺！？」」

つい立ち上がってしまう。そして視線の一斉射撃。振り向かなくてもわかる、これは『彼らならきつとなんとかしてくれる』という無責任かつ勝手な期待を込めた眼差しだ。

「お前たち。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？いないならこいつらで代表、副代表を決めるぞ」

「「ちよっ、ちよっと待った！俺はそんなのやら　　」」

「自薦他薦は問わないと言った。推薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟しろ」

「「い、いやでも　　」」

無駄とわかっただけでもまだ反論を続けようとした俺たちを、突然甲高い声かみなぎが遮った。

「待ってください！納得がいきませんかわ！」

バンツと机を叩いて立ち上がったのは、あのセシリアなんとかさんだ。おお、人望がここで役に立ったぞ。人とは仲良くしておくも

のだな。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

「そうだそうだが、もっと言ってみてや……ん？」

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までES技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭せうとうございませんわ！」

「……あれ？俺たち、人じゃなくなってる。なんで？ていうかイギリスも島国だろ。」

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」 興奮さめやらぬ というか、ますますエンジンが暖まってきたセシリアは怒濤どとうの剣幕けんまくで言葉ことばを荒げる。代表にはなりたくないが、そこまで言われるとちよつと癪しゃくだ。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難いがた苦痛で」

カチン。

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年なほ覇者だよ」「

あ。

「なつ……！？」

俺と一夏はつい、言ってしまった。こう、つるつと口が滑ってしまった。こういう時、俺と一夏は同じことを言ってしまうのだ。二人で言ったら怒り度二倍なのに……

おそろおそろ後ろを向くと、怒髪天どはつてんをつくと言わんばかりのセシリアが顔を真っ赤にして怒りを示していた。うわあ……やってしまった。

「あっ、あっ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

あー、もう。どうにでもなれ！？」

「決闘ですわ！」

「おう。いいぜ。四の五のいうよりわかりやすい」

「って、即答かよ！どうにでもなれとは思ったが、少しは考えようぜ。一夏まだIS持ってないじゃん……。」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い

いえ、奴隷にしますわよ」

「侮<sup>あなご</sup>るなよ、真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

いや一夏。お前手なんて抜いてたら即死だぞ……。」

「そう？何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会ですわ！」

「自分がクラスで一番強いなんて思うなよ。一夏はともかく、俺は強いぞ」

「そうですか、それではハンデは必要ないのですか？」

「おう」「」

一夏と被った。

「いや、一夏。お前は付けてもらえよ……。」

「いらねえよ」

「あら？その会話ですと、まるで一対一のように聞こえますが。まさか一対一でわたくしに勝てるんですか？」

「おう。一夏は知らんが、俺は余裕だ。」

「えー、それは代表候補制を舐<sup>な</sup>めすぎだよ。それとも知らないの？」  
「ちょうど後ろの女子が気なくさに話しかけてきた。けれど、その顔には苦笑と失笑のまじったもので、俺は力チンと来た。

「もちろん知ってるさ。代表候補制で自分をエリートっていうくらいなんだ、専用機も持ってるんだろ？」

「……………」

「……………え？一夏よ。なぜそこで黙るんだ？まさか、知らなかったのか？」

「ええ、もちろん持っていますわ。それを知って、ハンデはいらな

いなんて、とんだお馬鹿さんだこと」

くすくすとセシリアは笑ってしまった。あれ？よく見ると、クラスの女子のほとんどが笑っていた。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜日。放課後、第三アリーナで行う。一夏と一夜、それとオルコットは準備をしておくように。それでは授業を始める」

ぱんつと手を打って千冬姉が話を閉める。

それから俺たちは席に着き、すぐに三時間目の授業を始めた。

一夏は一、二時間目とは違い、真面目まじめに授業を聞いている。

さて、一週間後か。取りあえず『黒式こくしき』の調整でもしておくか……

s a i d o u t . . .

e p p 3 >

e p 2 (後書き)

次回 e p 3 『クラス代表決定戦』

誤字、脱字がございましたらお知らせください。

それでは読んで下さった皆様今後ともよろしくお願いいたします。

ep3 (前書き)

クラス代表決定戦

ー夏vsセシリア!

s a i d i c h i y o

セシリアと決闘の約束をした日の放課後。

「うっ……」

一夏は机の上でぐったりとうなだれていた。

「い、意味がわからん……。なんでこんなにややこしいんだ……？」

「お前が参考書捨てたから、だろ？」

「うっ……」

「まあいいや。約束通り教えてやるよ」

「ああ。頼む」

それにしても。

「（……ここじゃ集中できねえな）」

「（あ、ああ……）」

俺たちは、周りできゃいきゃいと小声で話し合っている女子に聞こえないように話した。

「ああ、二人とも。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「「はい？」」

俺たちのすぐとなり副担任の山田先生が書類を片手に立っていた。

「どうしたんですか？」

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言っつて、俺たちに部屋番号のかかれた紙とキーを渡してきた。

「あれ？俺と一夏は違う部屋なんですね」

「あ、本当だ」

部屋番号が二人とも別になっている。

「まあ、とりあえず部屋はわかりましたけど、荷物は一回家に取りに行かないと……」

あ、そっか。一夏は普通に家から来たから、荷物は家なのか。ち

なみに俺は、束さんのところから直接ここに来たから、荷物は全て持ってきている。って言っても、荷物なんて必要最低限の物しか持ってないけど。

「あ、いえ、荷物なら」

「私が手配しておいてやった。ありがたく思え」

ああ、この声、絶対千冬姉だよ。てか、足音一つなかったぞ。あんたは忍。。

パァンッ！

「一夜、それ以上変なことを考えるともう一回叩くぞ」

「……すみません」

なぜ、なぜばれたんだ！？読心術まで修得済みだと言うのか！？……うん。考えるのをやめよう。千冬姉に睨まれちゃった。

「まあ、生活必需品だけだかな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

おお、俺の持ち物より少ない。千冬姉よ、人間には日々の潤いも大事だと思うんだが。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。……えっと、その二人は今のところ使えません」

「え、なんでですか？」

俺、大浴場って好きなのに。

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」

そういえば。ここには、一夏と俺以外女子しかいないんだっただな。「ふ、二人ともっ、女子とお風呂に入りたいんですか！？だっ、ダメですよ！」

「い、いや、忘れてただけです！」

「そ、そうですか。えっと、それじゃあ私たちは会議があるので、

これで。二人とも、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くつちやダメですよ」

山田先生と千冬姉が出ていった。て、校舎から五十メートルくらいしかないのに、どうやって道草をくえというんだらうか。

「ん〜、じゃあ今日は帰るか。勉強は明日からで」

「そうだな。ここでやつても集中できないし」

俺たちは勉強をやめて寮に向かうことにした。

「えーと、ここか。1027室だな。一夏とは二部屋違いか」

俺は部屋番号を確認して、ドアに鍵かぎを差し込む。

ガチャ。

部屋に入ると、まず目に入ったのは大きめのベッド。それが二つ並んでいる。そこいらのビジネスホテルより遥はるかにいい代物しろものなのは間違いない。こう、見ているだけでふわふわ感が醸かもし出されている。これが格の違いというやつだらうか。国立万歳。

荷物をとりあえず床にやって、俺はベッドに飛び込む。

バタンツ！

ん？なんの音だ？ベッドに飛び込んでなるような音じゃないぞ。

んー、バタン？ああ、ドアを思いきり閉めたのか。なにかあったのか？

よし、見に行くか。

廊下に出てみると音の原因はすぐにわかった。

「……一夏、なにやってんだ？」

一夏が自分の部屋、1025室のドアの前にいた。

「一夜、それが」

ズドン！

「！！？」

一夏が何か言おうとしたとき、顔の真横、わずかに頬ほおの二ミリ隣から木刀の切っ先が突き出していた。え？このドア木製だよな？それを木刀で貫通するって言うのはどういう技術があれば可能なんだ。

「とうか、木刀？」

「…………… 箒か？お前、箒と同じ部屋なのか？」

「……ああ」

「……まあ、頑張れ。俺は部屋に戻る」

「……ああ」

さて、巻き込まれる前に部屋に戻るとしよう。

ズドン！

「って、本気で殺す気か！今のかわさなかつたら死んでるぞ！」  
すると、また箒が一夏を攻撃したようだ。

「…………… なになに？」

「あつ、織斑くんだ」

「えー、あそこって織斑くんの部屋なんだ！いい情報ゲット〜！」  
すると、騒ぎを聞き付けて、それぞれの部屋から女子がぞろぞろと出てきた。

って、みんななんて格好してんだ！？

全員ラフなルームウェアで、かなり男の目を気にしない格好をしている。一部の女子に至<sup>いた</sup>っては、眺めのパーカーを着て、下にはズボンもスカートも穿<sup>は</sup>いていない。白い逆三角形がちらちらとのぞいていた。

俺はすぐに自分の部屋に入り、ドアを閉めた。

『…………… 箒さん、部屋に入れてください。すぐに。まずいことになるので。とうか謝るので。頼みます。頼む。この通り』

自分の部屋に戻ってすぐに、ドア越しに一夏の声が聞こえてきた。

一夏も女子の格好に焦っていたのか、言葉に余裕がなかった。

うーん、一夏は箒と同じ部屋なのか。これから大変そうだな。

俺は特にすることもないので、夕食をとってすぐに寝ることにした。夕食の時に質問攻めにあったのは、言うまでもない。

翌日の一時間目。

「そうだ一夏」

一夏がいきなり、千冬姉に話しかけられた。なんだ？一夏のやつ、

なんかやったのか？

俺は一応、一夏の心配をしていた。

「お前のISだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

「予備機がない。だから少し待て。学園で専用機を用意するそうだし……？」

心配する必要はなかったようだ。それどころか専用機だと？この一夏に？

一夏は頭の上を『？』でいっぱいになっていると、教室中がざわめいた。

「せ、専用機！？一年の、しかもこの時期に！？」

「つまりそれって政府からの支援が出るってことで……」

「ああ……。いいなあ……。私も早く専用機欲しいなあ」

一夏は意味がわからないという顔をしている。千冬姉が教科書を読んでみるとため息混じりにつぶやく。

教科書をよんでもなんとなくしか理解できていないようだった。

「……あれ？そういえば、一夜くんは専用機もらえないの？」

クラスのだれかがそんなことをつぶやいた。まあ、当然といえば当然の疑問だ。

「あー……。俺はもう持ってるから」

俺がそう答えると、クラスの女子がみんなは「……えっ？」「……えっ？」と

言った。そして数秒後。一夏の時同様女子が騒ぎ出した。

「えー、一夜くんも持ってるんだ！いいなあ……」

「ってことは、うちのクラス専用機持ち三人もいるってこと……？」

ああ、そんなに騒ぐと……。  
バンッ！

千冬姉が教壇を叩いて、騒いでいる女子たちを静めた。

「さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令を」

「は、はい」

そして授業が始まった。

次の休み時間、セシリアがなにか言いに来たが、なにを言っていたか、はつきりいつて覚えていない。まあ一夏に言っているみたいだったし大丈夫だろ。

そして翌週、月曜。セシリアとの対決の日。

「なあ、一夏」

「どうした？」

対決の当日というのに問題が一つあった。

「お前のISって届いてるのか？」

「……いや、まだだ……」

そう、時間がかかるとは言っていたが、対決の当日になった今でも一夏のISは届いていないのだった。

「お前、このまま届かなかつたらどうするんだよ」

「いや、それは……」

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

「……? なんですか? 山田先生」

織斑くんと呼ばれたのでつい俺も返事をしてしまった。この夕イミングならあきらかに一夏のISのことだろう。

「あ、一夏くんの方です……えっと、それですなっ！ 来ました！

一夏くんの専用IS！」

思っていた通り、一夏のISが届いたらしい。

「一夏、すぐに準備しろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶつつけ本番でものにしろ」

ん、この人はたまに無茶なこと言うな。まあいいけど。

一夏はまだ状況がわかっていないらしい。

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせろ。一夏」

「え? え? なん……」

「……早く!」

山田先生、千冬姉、そしてさっきから一言も話さなかった篤の声

が重なった。

「ごんっ！と鈍い音がして、ピット搬入口が開く。斜めに噛み合うタイプの防壁扉は、重い駆動音を響かせながらゆっくりとその向こう側を晒していく。

そこに、『白』が、いた。

「これが……」

「はい！一夏さんの専用IS『白式』です！」

一夏はすぐに白式を装着し、千冬姉となにかを話して、すぐに敵つまり、セシリアのもとへと向かおうとしていた。

「箒」

しかし箒の顔を見て、心配していると思ったのか、声をかけていた。

「な、なんだ？」

「行ってくる」

「あ……ああ。勝つてこい」

その言葉に首肯で応えて、ピット・ゲートへ進んだ。その途中一夏はこちらを向いて『行ってくる』という意味を込めて頷いてきた。だから俺も頷いて応えた。

s a i d o u t

一夏は今、セシリアと戦っている。

s a i d i c h i k a

「二十七分。持った方ですわね。褒めて差し上げますわ」

「そりやどうも……」

「このブルー・ティアーズを前にして、初見でこうまで耐えたのはあなたが初めてですわね」

今の状態はというと、シールドエネルギーの残量67。実体ダメージ中破。唯一の武器『近接ブレード』はかるうじて使えるというレベルだ。

俺は四つの自立起動平気の弱点を見つけた。ビットを動かしてい

る間は制御に意識を集中させているから、他の攻撃ができなくなるのだ。

それに、セシリアは必ず俺の反応が一番遠い角度を狙っているのだ。それがわかってしまえばわざと隙を作ってしまうべき。そうすればそこからビットが来る。そこに合わせて斬りかければいいだけの話だ。

それがわかったので俺は簡単にビットを二機破壊した。それから残りの二機もすぐに破壊することができた。ここがチャンスだ！俺はセシリアに向かっていった。

s a i d o u t

「はああ……。すごいですねえ、一夏くん」

ビットではリアルタイムモニターを見ていた山田真耶がため息交じりにつぶやく。確かに一夏はISの起動が二回目だとは思えないほどの健闘ぶりだった。

しかし、千冬姉と俺は対照的に忌々（いまいま）しげな顔をする。

s a i d i c h i y a

「あの馬鹿者。浮かれているな」

「えっ？そうなんですか？」

「さつきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。あれは、あいつの昔から」

のクセだ。あれが出るときは、大抵簡単なミスをする」

「あいつまだあのクセ直ってなかったのかよ……」

ちなみに俺も昔はそんなクセがあったが、今ではすっかり直っている。

「へえええ……。やっぱりご姉弟なんですわー。そんな細かいことまでわかるなんて」

なんとなくいった山田先生に、千冬姉はハツとする。

「ま、なんだ。あれでも一応私の弟だからな……」

「あー、照れてるんですか？照れてるんですわー？」

「……………」

ぎりりりりつ。ヘッドロックが炸裂した。

「いたたたたつっ!!」

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「はっ、はいっ！わかりました！わかりましたから、離し  
うっうっ！」 あ

ぎゃあぎゃあと騒ぐ山田先生。ご愁傷様です。そんな中、箒は先  
生たちのやりとりを気にもかけていない様子で、ずっとモニターを  
見つめていた。

(一夏……)

箒が ほんのわずかだけ唇を噛んだとき、試合は大きく動いた。  
セシリアの間合いに入った一夏はセシリアに斬りかかろうとして  
いた。

その時にやりと、セシリアが笑うのが見えた。

「まずい畏だ!？」

グンツ。

俺が叫んだと同時に。腰部から広がるスカート状のアーマー。その  
突起が外れ、五、六機目のビットが現れ、一夏に狙いを定めていた。  
しかもそれは、さっきまでのレーザー射撃を行うビットではない。  
あれは『弾道型』だ。

ドカアアアッ!!

赤を超えて白い、そんな爆発と光に一夏は包まれていた。

「一夏っ……!!」

モニターを見つめていた箒は、思わず声を上げたていた。

さっきまで騒いでいた千冬と真耶も、爆発の黒煙に埋まった画面  
を真剣な面持ちで注視する。

「ふん」「なんだ」

黒煙が晴れたとき、千冬は鼻を鳴らし俺はつぶやいた。

「「機体に救われたな」、馬鹿者め」

俺と千冬姉の言葉が重なった。千冬姉、一言余計だろ……。

まだ漂っていた煙が、弾けるように吹き飛ばされる。  
そしてその中心には、あの純白の機体があった。  
そう、真の姿で

s a i d o u t

フォーマットとフィッティングが完了しました。確認ボタンを押してください。

s a i d i c h i k a

(な、なんだ……?)

頭に直接データが送られてくる。と、同時に目の前に現れるウィンドウ。その真ん中には「確認」と書かれたボタンがある。訳も分からずに押すと、大量のデータが流れ込んできた。

いや、正確には整理されているんだ。

キイイイン……。

高周波な金属音。けれどそれはどこか優しいものに感じられた。

刹那、俺の全身を包んでいる。いや、今や我が身そのもののIS光の粒子に弾けて消え、そしてまた形を成す。

「これは……」

新しく形成されたIS装甲はまだうすぼんやりと光を放っている。それはさっきまでの実体ダメージがすべて消え、それどころかより洗練された形へと変化していた。

「ま、まさか……一次移行!? あ、あなた、今まで初期設定だけの機体で戦っていたって言うの!？」

さっきのウィンドウに書かれていた『初期化』と『最適化』が終わったというの、つまりそういうことらしい。

これでやっと、この機体は俺専用になった。

改めて機体を見ると、最初の工業的な凹凸は消え、滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的などこか中世の鎧を思わせるデザインへと変わっている。

そして何より変わったのは、その武器だった。

近接特化型ブレード・《雪片式型》

日本刀から生まれたようなその刀身は、刀より反りのある太刀に近い。鑄くわにはわずかに溝があり、そこから呼応するように光が漏れ出ている。妙に機械的なそれは間違いなくIS装備として作られたものであることを示していた。

そして何より、その名前だ。

雪片ゆきひら。それは、かつて千冬姉が振るっていた専用IS装備の名称。刀に型成かたなした形成かたな。

……ああ、まったく。つくづく思い知らされる。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ。俺も、俺の家族は守

る」

「……は？あなた、何を言って」

「とりあえずは、千冬姉の名前を守るさ！」

元日本代表の、その弟。それが不出来では、格好がつかない。そう、あの格好いい千冬姉が格好付かないなんて、冗談もいいところだ。しかも笑えない。

「というか、逆に笑われるだろ」

「だからさつきから何の話を……ああもう、面倒ですわ！」

弾を再装填さいそうてんしたビットが二機、セシリアの命令で飛んでくる。しかも射撃型ビットよりも速い。だが

(見える……！)

ギンッ  
！

横一閃よこいつせん。両断されたビットは慣性そのまま俺の横を通り過ぎて、そして爆はぜた。

爆破の衝撃が背中に届くより速く、俺は再度セシリアへと突撃する。機体の瞬時加速度、センサー解像度はさっきの比じゃない。圧倒的に使いやすい。

「おおおっ！」

手の中でエネルギーがその密度を増していくのを感じる。刹那せつな、

雪片の刀身が光を帯び、より強い力の存在を俺に伝えてきた。

(行ける……!)

セシリアの懐ふくみに飛び込んだ俺は、下段から上段への逆袈裟さげすま払いを放つ。

が、その斬撃ざんげきが当たる直前に決着を告げるブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者　セシリア・オルコット』

え……?

「あれ……?」

たぶん俺は全力で「なんで?」という顔をしていたことだろう。向き合ったセシリアも、ぼかんと口を開けて同じような表情をしている。

そしてそれは、第三アリーナに詰めかけていたギャラリーも、ピットで試合を見守っていた篤、山田先生もだった。

千冬姉と一夜だけは「やれやれ」と言う顔をしている。

何が起こったかわからないまま、試合は終了して、結果俺は負けた。

s a i d o u t

一夜は今、ピットで一人試合の準備をしていた。

s a i d i c h i y a

「早く試合始まんねえかなー」

俺はピットで一人、試合が始まるのを待っていた。ちなみに一夏は、さっきの試合なぜ自分は負けたのかを、千冬姉に聞きに行った。そして俺は、一夏に勝ったセシリアと試合をするのだ。しかし、セシリアの専用IS、ブルーティアーズの整備に時間がかかっているらしい。つまり、一夏との試合で受けた傷を直しているのだ。

「一夜くん、準備ができたそうです」

おー! やっと準備ができたようだ。

「待ちくたびれたぜ。……それじゃ、行ってくるかな」  
そう言っつて俺はピット・ゲートに進む。

s a i d o u t

e p 4 > . . .

### e p 3 (後書き)

今回一夏vsセシリアの場所はほとんど原作と同じなのでつまらなかつたかも知れませんが、そこがないと次に行けないので、そこは許して下さい(^-^;) )

そのかわり、次話では一夜vsセシリアに入るので、オリジナル満載です！

これからすぐに取り掛かりますが、オリジナルなので時間がかかります。かもしれないが、楽しみにして待っていて下さると嬉しいです。

ご意見、ご感想お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2918q/>

---

IS ~インフィニット・ストラトス~ もう一人の一夏! ?

2011年1月25日22時54分発行